



## 交流する楽しさも 知った大学での学び

—立教セカンドステージ大学での再チャレンジ

会社員  
**金本 譲治**

【かねもと・じょうじ】1951年埼玉県出身。大学卒業後、旅行、航空、流通、通信など複数の外資系企業に勤務。2005年には英国ヨーク市に本社を置く通信サービス会社の日本法人を立ち上げた経験も持つ。2018年4月、週1日勤務になったことを機に、立教セカンドステージ大学本科入学。2019年3月同修了し、本年4月から同専攻科入学。

### ◆「立教セカンドステージ大学」とは？

私が2018年4月から学んでいる立教セカンドステージ大学は2008年、50歳以上のシニアのために創設された学びの「場」です。「学び直し」「再チャレンジ」「異世代共学」を目的とし、これまでに約1000名が修了しています。

市民文化講座などとは異なる特徴としてまず、履修科目も多く必修科目・選択科目・ゼミ・課外活動などが基盤となる点が挙げられます。シニアのニーズにそったユニークなカリキュラムが工夫されています。所定の単位を取得すると、文部科学省が定める「履修証明書」が交付されることも我々修了生にとつては魅力あるものです。

なかでも最大の特徴は、すべての受講生がゼミに所属し、担当教員の指導を受けながら、修了論文を作成することだと思います。私の所属したゼミには、50歳代前半から70歳代までの年齢構成で、男性7名女性5名、元の職業は、公務員、銀行員、学校教員、大手企業社員、病院職員、中小企業経営者、主婦等と異なる社会経験を有するシニアが集結しました。毎週木曜のゼミでは、どのようにして修了論文を完成すべきか、皆が意見を出し合い熱心な議論を展開しました。

### ◆受講を決意した理由

私は外資系通信サービス会社に勤めており、現在は週1日の勤務です。その会社の英国本社が、2016年9月、私が65歳になったことを機に、ワークライフ・バランスを視野に入れたセミリタイアメント・プランを提案してきました。まずは週5日勤務から週4日勤務へ、その後2018年4月からは週1日勤務となる内容でした。その提案を受けて、私は「いよいよ自分もその年齢になったのか…」という諦めと、「ま

だやれる」という気持ちが混在し心の中は複雑でした。

そんな中、以前から関心を持っていた立教セカンドステージ大学の事務室に問合せたところ、2018年4月入学本科生の募集を知り、直ぐに入学願書を提出しました。受講を決意した理由は、週1日みの勤務となると、初めの3カ月程度はよくてもいずれ時間を持て余すことになるだろう。そうならないためには「退職後の生き方」を示したハウツー本に書いてあった「今日用事がある（教養）」「今日行く所がある（教育）」を実践することが最善と考えたからです。

さらに、社会人になってから専門分野以外について学ぶ機会を持たなかったこともあり、この機会に大学の開講科目を受講することは自身の教養を高める上でも好都合と考えました。

妻は、私が受講することで毎日規則正しい生活ができると、大いに賛成してくれました。その一方、同年齢の友人たちは当時全員就業していたこともあり、「学ぶことより、実利のある仕事を優先すべきでは」との意見でした。

### ◆入学してからの日々

2018年4月3日、立教大学の構内にある礼拝堂で開催された入学式の後、11日から春学期の授業が始まりました。

大学の正門をくぐる前までは、10代の頃と同様「これから勉強する」という決意と

緊張感が半々で、少しばかり興奮していました。1回目の講義が始まると、講師の説明を聞き逃さないよう集中してノートするのみで90分があつという間に終わり、再度90分の2回目の講義を終えてから帰宅途中の電車内では、安堵感もあつて寝てしまいました。

立教セカンドステージ大学の本科18単位



趣ある立教大学の校舎をバックに



修了証書授与式後に学長と共に

以上、専攻科（2年目に進学した場合）は14単位以上、3群の開講科目を選択し、さらにオムニバス講義「学問の世界」とゼミ・修了論文が必修科目となります。私は勤務日である金曜日を除き、毎日通学した春学期は1日2科目、秋学期は1日1科目を受講し、欲張つて40単位を取得しました。開講科目が多かつたので、どの科目を選択すべきか迷いました。秋学期に受講した「プラチナ社会におけるアクティブシニア論」は、特筆すべき内容でした。基本講義をベースに、国内外のケーススタディやワークショップ、ゲストスピーカーの招請などもある授業は、これからのシニア世代を担う受講生に人気があり、いつも教室は活気に溢れて、学びの楽しさを実感しました。

他方、苦しみと言えば、大方の受講生が思い悩んだ修了論文への取り組みでした。テーマをどうするかも思案のしどころでしたし、文字数1万2000字～1万5000字という条件もハードルが高く、提出期限の迫つた昨年12月は毎日長時間パソコン画面に向き合つたため、酷い眼精疲労や肩こりに悩まされました。

さらに夏期集中講義では酷暑の中、「環境保全とコミュニティ形成」のテーマの下、東京近郊で郊外活動を行ったことは、自らの体力の限界への挑戦でした。

### ◆ 1年間の受講を終えた自身の変化

様々な科目を受講し、異なる社会経験を

有するシニアと一緒に学ぶことができたことで、学ぶことのみならず、多くの受講生と交流する楽しさを知りました。

課外活動でも納涼パーティ委員会に所属し、異なる世代間で同じ目標に向かって3カ月半、毎週木曜に協議を重ねた結果、成功裏に終えることができたことで、会社以外でも自分が貢献できるということを知りました。

以前は全くの会社人間で、会社以外の付き合い合いといえば学生時代からの仲間のみでしたが、今後は多くの人との交流を通じて、充実したシニアライフを過ごすことができるような気がしています。

苦手意識を持っていたレポートや論文作成についても、苦勞しながらも3000字、6000字、1万5000字とテーマに即した内容を期限までに提出できたことで、自分にもやれるという自信に繋がりました。

### ◆ これからやりたいこと

この4月からは同じ大学の専攻科へ入学しており、昨年同様、学びに軸足を置き、1日増えた週2日勤務とのバランスをうまく取りながら、英会話同好会とワイン同好会にも参加しようと考えています。

大学以外に2020年東京オリンピックボランティアにも応募しており、インバウンドへの観光ガイド、グリーンサポーターボランティアの講習会は修了していますので、できることから取り組んでいくつもりです。